

2017/4/24

(日々雑感 86)



ぼくは俊麗の居る店から今住んでいる部屋まで、1時間半かけて歩いて帰るのがすきだ。途中、国道があつたり、小川があつたり、さくら並木の道があつたりする。その夜道を今日もとぼとぼ歩きながら、先ほどまで店で仕事をしていた俊麗を思い出して考えた。

今の日本のお父さんは、娘のご機嫌をとっている。俊麗のお父さんは一生懸命仕事をしていたが、特に俊麗に声はかけなかった。しかし、一生懸命仕事をしてる「老斗」のおとうさんはすごい！！と俊麗はその後ろ姿を見ながら黙って感じていたのかもしれない。

ところで今日は、店に入るなりその俊麗が、待ち構えてでも居たかのように

「今日は、いいもの上げる。待ってて」

と言って、僕の半袖シャツの端っこを軽く二、三度引っ張った。

しばらくして、俊麗がばかでかい餃子を出してくれた。

はじめ、それを僕は俊麗の特別な気持ちからだと思ったのだが、その後で俊麗が

「これ、料理人が自分たちの食事のために作って食べる。タダ。老斗、食べる。長さん、鄧さん作った」

と言った。たぶん日本でいう板場の「まかない」料理。

長さんと鄧さんが調理場からこっちを向いて「うっす」というように小さな挨拶を送ってきた。

「謝謝！！」

と長さんと鄧さんに

「フェイスチャン謝謝！！（おおきに。ありがとう）」

と俊麗に言った。

「これ、ニラと卵。おいしい」

「そっか」

ニラ玉オムレツの焼き餃子版。それがお皿に二個。

がぶりと喰い付いた。

ちょっと塩気のあるぱりっとした皮を破って、じゅわ〜っと、薄黄緑色のお汁があふれ出した。

「ん！うまい！！」

みんなで作ってくれた。みんな仲がいい。どうやら、ヘンなことにもなっていない。

その後、僕は俊例にこのほかでかいが、とても旨い「餃子の化け物」の作り方を根掘り葉掘り訊いた。俊麗は、ひとつひとつたどたどしい日本語とジェスチャーを交えて教えてくれた。時々、長さんと鄧さんが中国語で助けを出していた。

これは、昨日安いお菓子を二三個買って、みんなに差し入れたその返礼なのだと気がついた。何でこんなことをしてくれるのか？と訊かれたので

「外国から働きに来ている人は、どんな国の人でもみんな我が国のお客さんだ。お客さんにはもてなしをする。それだけのことだ」

と言ったのを思い出した。

そのとき俊麗は何も言わなかった。しかし、一日経って、このデカ餃子が出てきた。

「ん、旨い。チェイチャンハオチー（かなりうまい）」

もう一度言った。

「そうか、これでいいのかもしれない」

そう思った。壊したくないと思った。

俊麗と話しているととても楽しい。本当に楽しい。これは今までになかったことだ。

そうして、俊麗は、かわいい。とてもかわいい。本当に素直に、誰はばかることなくそう言える。しかもそう言っている自分に、うしろ暗さや薄暗さがどこにも感じられない。とても気分が良いだけだ。

是も今まで、おんなに感じたことのなかった感情だ。

よく考えてみたら、僕は俊麗に、単におんなではない、おんな以上の何か別のものを感じているのかもしれないな、と思った。

今までに味わったことのない、何かがそこにあるような気がして、すこし「おやおや」という気持ちになっている。

まだ、上手く説明できないとらえどころのないものだが、中国だとか日本だとか言うことではなく、老人と娘子と言うことでもなく、何か違ったあたらしいもの。強いて言うなら、かなりくつろげる何か。かなりくつろいでしまう何か。

そんな感じがして、まるで是まで「日本の図鑑」には載っていなかった「新種の生き物」にでもあったかのように少しとまどいつつも、毎回行くのを楽しみにしている。

だから僕は俊麗が好きだ。面白いヤツに会ったなと喜んでいる。最近とみに、俊麗を含めてコイツらがかわいくて仕方ない。